

鳥取県米子市

米子城跡

第 38 次 調 査

2003

財団法人 米子市教育文化事業団

序

米子市は鳥取県西部の中核都市で、北は日本海に面し、東には大山を控える自然環境に恵まれた地域であります。また、古代からの遺跡の宝庫で、歴史的、文化的遺産にも恵まれています。

当事業団では、この度、マンション建築工事に伴い、米子市加茂町1丁目所在の米子城跡第38次調査の発掘調査を行ってまいりました。

その結果、江戸時代後期以降の建物跡や屋敷の境界を示すと思われる溝を確認しました。これらは当時の城下町の様子を窺ううえで貴重な資料となるものと思われま

す。これらの資料が今後の学術研究及び教育のために広く活用され、歴史を解明する契機となるとともに、広く一般の方々に埋蔵文化財に対する理解、関心を高めていただくうえでお役に立てば幸いに思います。

最後になりましたが、調査に際しましては多大なご理解とご協力をいただきました有限会社益尾地所、並びに地元の皆様をはじめ、ご指導、ご支援を賜りました調査従事者、関係各位に対して厚くお礼を申し上げます。

平成15年（2003年）3月

財団法人 米子市教育文化事業団

理事長 山 岡 宏

例 言

1. 本書は平成14年度（2002年度）に鳥取県米子市加茂町1丁目において実施したマンション建築工事に伴う米子城跡第38次調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は有限会社益尾地所の委託を受けて財団法人米子市教育文化事業団が実施した。
3. 本書は高橋が執筆、編集した。
4. 出土遺物、実測図、写真等は米子市教育委員会で保管している。

凡 例

1. 本書に用いた方位はすべて座標北を示し、高度はすべて海拔高である。また、座標値は国土座標第V系を用いた。なお、掘立柱建物及び溝状遺構の主軸方向は座標北との角度で示した。
2. 第1図は1：2,500国土基本図「米子・境港都市計画計画図（米子市）22」と「米子・境港都市計画計画図（米子市）27」を複製、縮小、合成し、加筆したものである。
3. 本書に用いた遺構の略号は以下のとおりである。
SA：柵列 SB：掘立柱建物 SD：溝状遺構 SE：井戸 P：ピット
4. 本文中、挿図中、表中及び写真図版中の遺物番号は一致する。
5. 遺物観察表中の※は復元値を、△は残存値を示す。
6. 米子城跡の遺跡の表記方法については平成7年度（1995年度）までは本調査のみに調査順に番号を付して遺跡名としていた。平成8・9年度（1996・1997年度）は試掘調査を含めて調査順に番号を付し、本調査については平成7年度（1995年度）以前と同様に調査順に番号を付したが、試掘調査については調査順に次数で遺跡名を表した。平成10年度（1998年度）からは本調査、試掘調査とも調査順に次数で遺跡名を表すこととなった。

平成7年度（1995年度）以前 米子城跡1～9遺跡

平成8、9年度（1996・1997年度） 米子城跡第10～20次調査（試掘調査）
米子城跡21・22遺跡（本調査）

平成10年度（1998年度）以降 米子城跡第23次調査～

しかし、このように年度によって遺跡の表記方法が異なることは混乱をきたすため、本書では平成7年度（1995年度）以前は本調査のみに、平成8年度（1996年度）以降は試掘調査を含めて調査順に次数で遺跡名を表すこととした。新旧の遺跡名の対照は表1の遺跡名新旧対照表を参照されたい。なお、久米第1遺跡、米子城跡第10～20次調査、米子城跡第23次調査以降は従前どおりである。

新 遺 跡 名	旧 遺 跡 名	新 遺 跡 名	旧 遺 跡 名
米子城跡第1次調査	米子城跡1遺跡	米子城跡第7次調査	米子城跡7遺跡
米子城跡第2次調査	米子城跡2遺跡	米子城跡第8次調査	米子城跡8遺跡
米子城跡第3次調査	米子城跡3遺跡	米子城跡第9次調査	米子城跡9遺跡
米子城跡第4次調査	米子城跡4遺跡	米子城跡第21次調査	米子城跡21遺跡
米子城跡第5次調査	米子城跡5遺跡	米子城跡第22次調査	米子城跡22遺跡
米子城跡第6次調査	米子城跡6遺跡		

表1 遺跡名新旧対照表

目 次

序
例 言
凡 例
目 次

第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過と方法	1
第3節 調査体制	1
第2章 位置と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 調査の成果	5
第1節 調査の概要	5
第2節 検出した遺構と遺物	5
第3節 遺構外出土遺物	12
第4章 まとめ	14
出土陶磁器、土器観察表	
写真図版	
報告書抄録	

挿 図 目 次

第1図 調査地及び周辺遺跡分布図	4
第2図 遺構配置図	5
第3図 土層図	6
第4図 S A-01・02遺構図	7
第5図 S B-01・02遺構図	8
第6図 S D-02・04・05・06遺構図	10
第7図 S D-09・10・11遺構図及びS D-10出土遺物実測図	11
第8図 S E-01遺構図	12
第9図 遺構外出土遺物実測図	13
第10図 遺構変遷図	15

図 版 目 次

図版1 1区全景（南東から）	図版3 S D-09（東から）
2区全景（北西から）	S D-10（北東から）
S B-01（北西から）	S E-01
S A-01、S B-02（南東から）	S E-01断面
図版2 S D-02（南西から）	図版4 出土遺物
S D-04（南西から）	
S D-05（北東から）	
S D-06（西から）	

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

平成13年（2001年）12月、有限会社益尾地所（代表取締役 益尾忠蔵）から、加茂町1丁目におけるマンション建築工事に伴い、埋蔵文化財の有無及び取り扱いについて米子市教育委員会に協議があった。工事予定地は米子城跡外郭内に位置し、周辺の調査でも近世を中心とする遺構と遺物が確認されているため、米子市教育委員会は平成14年（2002年）2月に工事予定地内の試掘調査（第37次調査）を実施し、近世以降の遺構と遺物を確認した。このため有限会社益尾地所と米子市教育委員会との間で再度、遺跡の取り扱いに関する協議を行い、本調査の実施を決定し、平成14年度（2002年度）に財団法人米子市教育文化事業団が発掘調査を実施した。

第2節 調査の経過と方法

現地調査は平成14年（2002年）4月に着手した。

調査は排土を場外に搬出せず、場内で処理しなければならないが、排土置場が狭いため、全面調査は不可能であることから、調査区を2つに分けて行った。調査区は北西側を1区、南東側を2区とし、1区→2区の順番で調査を行った。

調査地は宅地として利用されていたところで、現地表面から厚さ約70～80cmにわたって造成がなされていた。そのため調査に先立って重機によりこの造成土を除去し、その後、人力による遺構、遺物の検出を行った。

現地調査は平成14年（2002年）4月末に終了した。現地調査終了後は、出土遺物の整理作業を行い、その後、調査成果をまとめ、発掘調査報告書を刊行した。

第3節 調査体制

発掘調査は下記の体制で行われた。

調査主体 財団法人 米子市教育文化事業団

理事長 森田隆朝（米子市長：平成14年4月1日～平成14年5月27日）

山岡 宏（米子市教育委員会教育長：平成14年5月28日～）

専務理事 山岡 宏（平成14年4月1日～平成14年5月27日）

小林道正（財団法人米子市教育文化事業団 事務局長：平成14年5月28日～）

埋蔵文化財調査室

室長 妹澤佐智夫（米子市教育委員会文化課長）

次長 矢倉紀夫

調査担当 財団法人 米子市教育文化事業団 埋蔵文化財調査室

調査員 高橋浩樹

臨時職員 福嶋昌子

調査指導 鳥取県教育委員会 鳥取県埋蔵文化財センター 米子市教育委員会

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

米子市は鳥取県の西部に位置し、地形的には中国山地から流れる日野川の両岸に広がる沖積平野（米子平野）とこれを取り囲む丘陵からなっている。米子平野は日野川によって形成された日野川扇状地、その北側に低地と発達した砂州からなる日吉津低地、法勝寺川流域に形成された法勝寺川埋積谷低地（法勝寺平野）、米子市街地の大部分をのせる米子低地（沖積地）からなる。

近世の米子は西伯耆の政治、経済の中心であるとともに交通の要衝地でもある。鳥取城下から西へ向かってきた伯耆街道の終点であり、南西から北上してきた出雲街道は当城下東部で伯耆街道と合流する。北部からは北西へ外浜境往来、内浜境往来が走り、東部からは法勝寺往来が南下する。

米子城跡は米子城とその城下町から成る遺跡で、米子市の西部、弓浜半島の基部西側にあり、西は中海に面している。米子城は米子低地の西側縁辺の丘陵先端の標高90mの湊山に築かれている。この場所は眼下に中海が一望でき、さらに天然の良港をひかえ、中海水運の要衝地に占地している。城下町は米子城の北・東側に形成されており、湊山の山麓に内堀を巡らせ、さらにその外側にも外堀を巡らせている。内堀の内側（内郭）には天守閣をはじめとする城の諸施設があり、内堀と外堀の間（外郭）には武家屋敷がある。外堀の外には外堀と近世山陰道に沿って職人・町人の町が形成され、寺院を一直線に配置した寺町も形成されている。なお、武家屋敷のある外郭が町（ちょう）と呼ばれたのに対して職人・町人が居住する外堀の外は町（まち）と呼ばれて区分された。

第2節 歴史的環境

近世以前の米子城下は湊山山麓や沖積地の微高地及び砂丘上で断続的ではあるが、生活の痕跡が窺える。

縄文時代は久米第1遺跡、第5・9・21次調査（10、15、16）で岩礫性の旧地形を確認している。また、久米第1遺跡（9）では縄文時代前期初頭、前期末、中期、晩期の土器、石鏃、石錘、黒曜石剥片などが出土し、第5・9・21次調査でも縄文時代晩期の土器が出土している。

弥生時代は第7次調査（21）で弥生時代中期の遺物包含層と貝の堆積層を確認し、第25次調査（13）でも弥生時代中期中葉の遺物包含層を確認している。また、第21次調査では弥生時代中期の土坑14基と掘立柱建物1棟が確認され、前期～中期後葉の土器が出土している。また、第6次調査（7）では弥生時代末～古墳時代初頭の土器とともに土坑と溝が確認され、第2次調査（6）でも弥生時代末～古墳時代初頭の土器が出土しており、特にこれらの2遺跡からは畿内系土器が出土していることが注目される。なお、久米第1遺跡では前期～後期、第5次調査では前期の土器が出土している。

古墳時代は第21次調査で前期の溝1条と6世紀後半の土坑1基が確認され、前期～後期の土器が出土しており、特に前期のものには畿内系土器がみられる。また、第1次調査（8）では埴輪が出土し、久米第1遺跡でも6世紀中葉～7世紀中葉の須恵器とともに埴輪が出土しており、城山に古墳群が存在するものと推測される。なお、第1次調査、久米第1遺跡では前期の土器が出土し、第3・7・9・21・25次調査では須恵器が出土している。

奈良～平安時代は第21次調査で11～12世紀の井戸と土坑が確認されており、第6次調査では平安時代後半の土坑が確認され、河川堆積による砂層から8世紀中葉～9世紀後半の土器が出土している。また、久米第1遺跡では奈良～平安時代前半の土器が出土している。

中世は城下の大部分の遺跡から中世後半の遺物が出土しており、久米第1遺跡では15世紀後半～16世紀中葉に大規模な造成が行われている。また、島津家『家久君上京日記』（天正3年 1576年）には「よなこといへる町に着き」とあり、中世後半には飯山山麓から湊山山麓にかけて中世米子城の城下町的な町が形成されていたものと思われる。また、久米第1遺跡では焼土層と炭化したオムスビ状の米塊を確認し、多くの五輪が井戸に捨てられた状態で検出されており、元亀2年（1571年）に羽倉孫兵衛が米子城を攻め、城下を焼き討ちしたことを裏付けている。

米子城の始まりは応仁～文明年間（1467～87年）に出雲国守護代尼子氏と伯耆山名氏との合戦の際、山名教之の一門、山名宗幸により出雲・伯耆国境警備の砦として築かれたものである。この砦は近世米子城の本丸が置かれた湊山の東側にある独立丘陵飯山（標高59m）に築かれている。

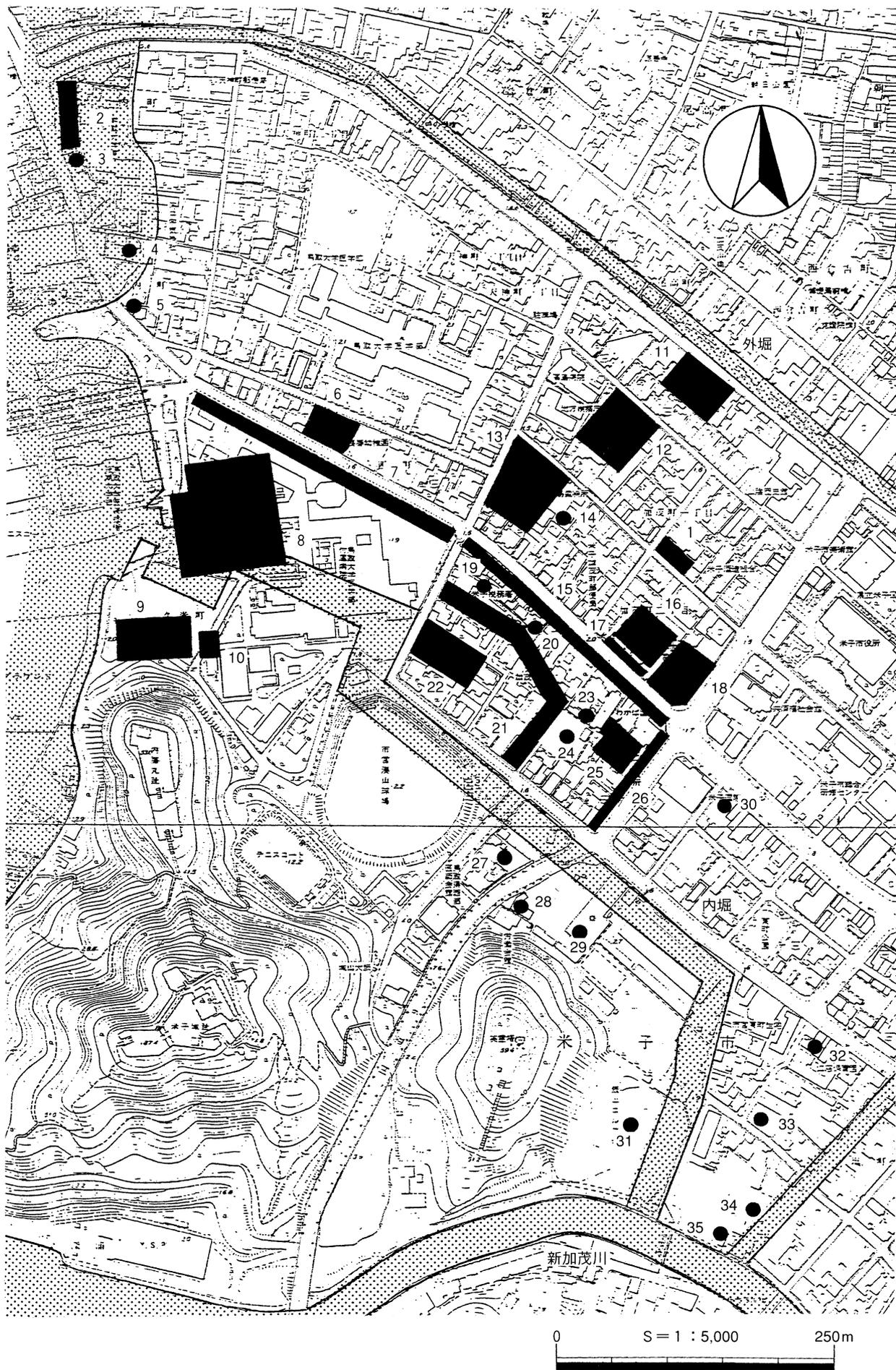
文献による“米子城”の初見は『出雲私史』の文明2年（1470年）の記述にみられ、その後も米子城は伯耆・出雲国境にあり、中海を臨む軍事、政略上の重要地でもあることから、尼子氏、毛利氏による攻守争奪の場となる。

近世米子城は天正19年（1591年）に東出雲・隠岐・西伯耆12万石を領有する吉川広家によって築城が開始されるが、慶長5年（1600年）に吉川氏は関ヶ原戦に敗北し、周防国岩国に転封となる。『戸田幸太夫覚書（吉川家文書）』によると、この時点で米子城は「十の内七つ程も出来候」とある。その後、吉川氏にかわって伯耆18万石の領主となった中村一忠によって慶長7年（1602年）に城が完成する。『米子城石垣御修覆御願絵図』（寛文7年1667年）、『湊山金城米子新府』（享保5年 1720年）などの絵図によれば、城は湊山を本丸とし、その北裾に二の丸、三の丸を配し、さらに、飯山（采女丸）、丸山（内膳丸）を出丸として構成され、南・東・北に内・外二重の堀を巡らしている。城の裏手の深浦には中世以来の城の防衛と物資輸送の要地として、御船手曲輪が置かれ、ここに御船頭屋敷、番人小屋、船小屋が設けられていた。本丸には五重の大天主と四重の副天主（四重櫓）があり、内膳丸には櫓と倉庫が備えられていた。また、二の丸には城主館、櫓、武器庫、侍部屋、三の丸には作事小屋、厩、材料小屋、米蔵、詰所等が配されていた。

中村氏は在城8年で断絶し、慶長15年（1610年）には伯耆国会見・汗入郡6万石の領主として加藤貞泰が城主となる。そして、元和3年（1617年）には因幡・伯耆の領主となった池田光政の一族池田由之が米子城預かり（3万2千石）となる。その後、寛永9年（1632年）からは池田家の家老荒尾氏が米子城預かり（1万5千石）となり、以後明治2年（1869年）まで続いた。城は明治5年（1872年）に士族に払い下げとなり、明治6年（1873年）には城内の建物類は売却され、数年後には取り壊される。

1 第38次調査	2 第26・29次調査	3 第28次調査	4 第30次調査	5 第15次調査
6 第2次調査	7 第6次調査	8 第1次調査	9 久米第1遺跡	10 第5次調査
11 第23・36次調査	12 第4次調査	13 第25次調査	14 第11次調査	15 第16・17・21次調査
16 第9次調査	17 第27次調査	18 第3次調査	19 第18次調査	20 第13次調査
21 第7次調査	22 第33次調査	23 第14次調査	24 第10次調査	25 第8次調査
26 第22次調査	27 第31次調査	28 第12次調査	29 第35次調査	30 第32次調査
31 第39次調査	32 第34次調査	33 第24次調査	34 第20次調査	35 第19次調査

表2 周辺遺跡一覧表



第1図 調査地及び周辺遺跡分布図

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

調査は排土置き場の都合上、調査区を2つに分け、まず、北西側の調査区（1区）の調査を行い、その後に南東側の調査区（2区）の調査を行った。

基本層序は現地表面から近現代の造成土、灰褐色粘質土（第1層）、茶褐色砂質土（第2層）、黒色粘質土（第3層）となっており、これ以下は砂が厚く堆積する。

検出した遺構は柵列2条、掘立柱建物2棟、溝状遺構11条、井戸1基、土坑6基である。

第2節 検出した遺構と遺物

SA-01（第4図）

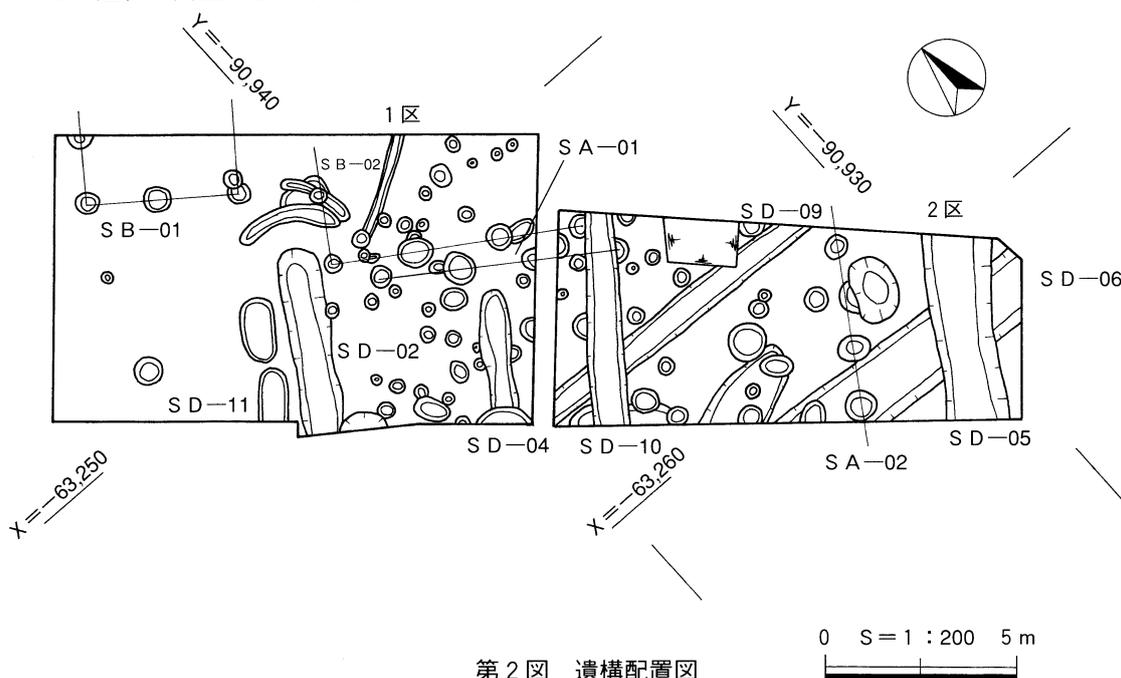
SA-01は3間分（6.3m）を検出した。南東側は攪乱を受け、さらにその南東側の柱穴は調査区外に位置する可能性があるため、P-4で完結するのがあるいはさらに南東へのびるのかは不明である。柱穴は円形及び楕円形を呈しており、径50~80cm、深さ15~20cmをはかる。柱間はP-1~P-2が2.2m、P-3~P-4が2.2mと等間であるが、P-2~P-3は1.9mと狭くなる。P-1には一辺12cmの柱痕と根石があり、P-3にも根石がある。主軸はN-58°-wである。

柱穴からは遺物は出土しなかった。

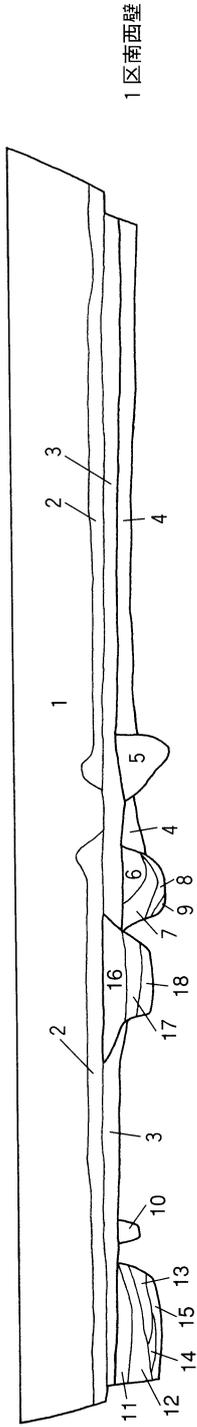
SA-02（第4図）

SA-02は3間分（4.3m）を検出し、さらに北東及び南西にのびるものと思われる。柱穴は円形及び楕円形を呈しており、径60~90cm、深さ30~40cmをはかる。柱間はP-1~P-2が1.4m、P-2~P-3が1.4m、P-3~P-4が1.5mでほぼ等間である。主軸はN-34°-Eである。

柱穴からは遺物は出土しなかった。



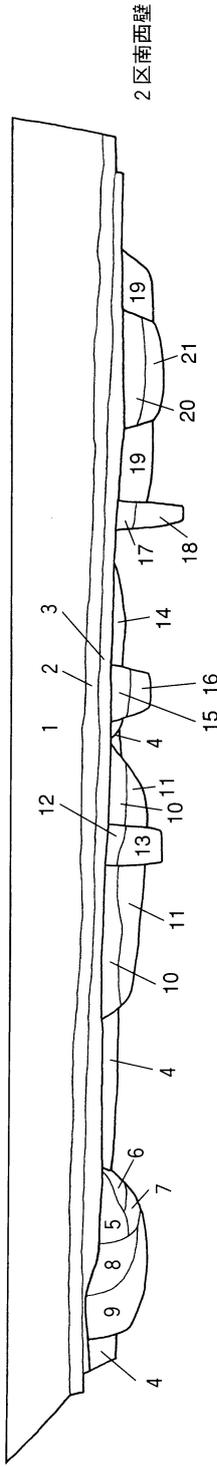
H=2.50m



1 区南西壁

- 1 造成土
- 2 灰褐色粘質土 (第1層)
- 3 茶褐色粘質土 (第2層)
- 4 黒色粘質土 (第3層)
- 5 灰白色粗粒砂 (SD-11)
- 6 暗灰色粘土 (SD-02)
- 7 灰褐色粘質土 (SD-02)
- 8 暗灰褐色粘質土 (SD-02)
- 9 灰褐色中粒砂 (SD-02)
- 10 黒色粘質土
- 11 暗灰色粘質土
- 12 暗灰色粘土 (乳褐色の有機物を含む)
- 13 黒色粘質土 (炭化物、木質を含む)
- 14 灰褐色シルト
- 15 茶褐色粘質土 (腐植土層)
- 16 灰褐色粘質土 (SE-01)
- 17 暗灰色粘質土 (SE-01)
- 18 灰色砂と灰色粘質土の混合層 (SE-01)

H=2.50m

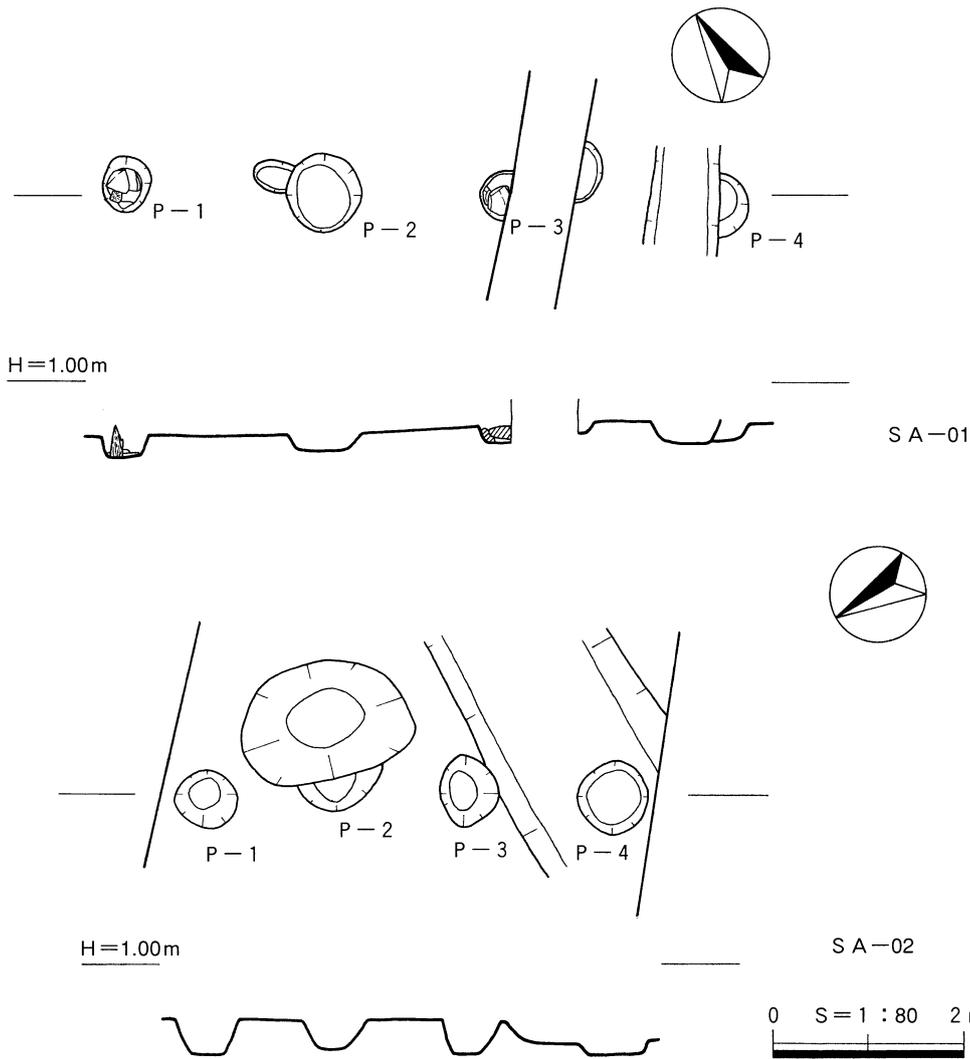


2 区南西壁

- 1 造成土
- 2 灰褐色粘質土 (第1層)
- 3 茶褐色粘質土 (第2層)
- 4 黒色粘質土 (第3層)
- 5 灰色細粒砂と暗灰色粘土の混合層 (SD-05)
- 6 暗灰色粘土 (SD-05)
- 7 灰褐色粘土 (SD-05)
- 8 灰色中粒砂 (SD-05)
- 9 灰白色中粒砂 (SD-05)
- 10 灰褐色粘質土 (SD-06)
- 11 暗灰色粘土 (SD-06)
- 12 灰色微細粒砂と灰褐色粘質土の混合層 (鉄分を含む)
- 13 灰色微細粒砂と灰褐色粘質土の混合層 (礫を含む)
- 14 灰褐色粘質土 (SD-08)
- 15 灰色細粒砂と灰色粘土の混合層
- 16 灰褐色粘質土
- 17 灰色微細粒砂と灰色粘土の混合層
- 18 灰褐色粘質土
- 19 暗灰色土 (鉄分を含む)
- 20 灰色粘質土 (SD-10)
- 21 暗灰色粘土 (SD-10)

0 S=1:80 2m

附3 図 土層図



第4図 SA-01・02遺構図

SB-01 (第5図)

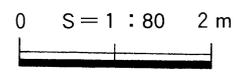
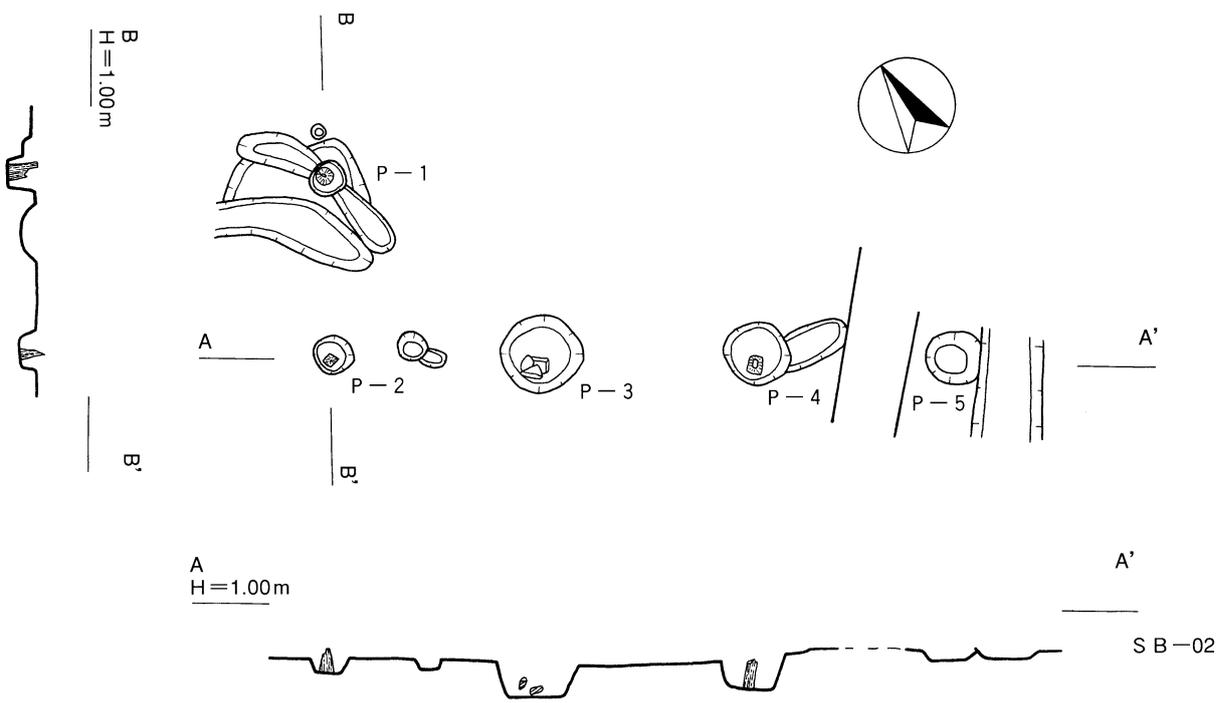
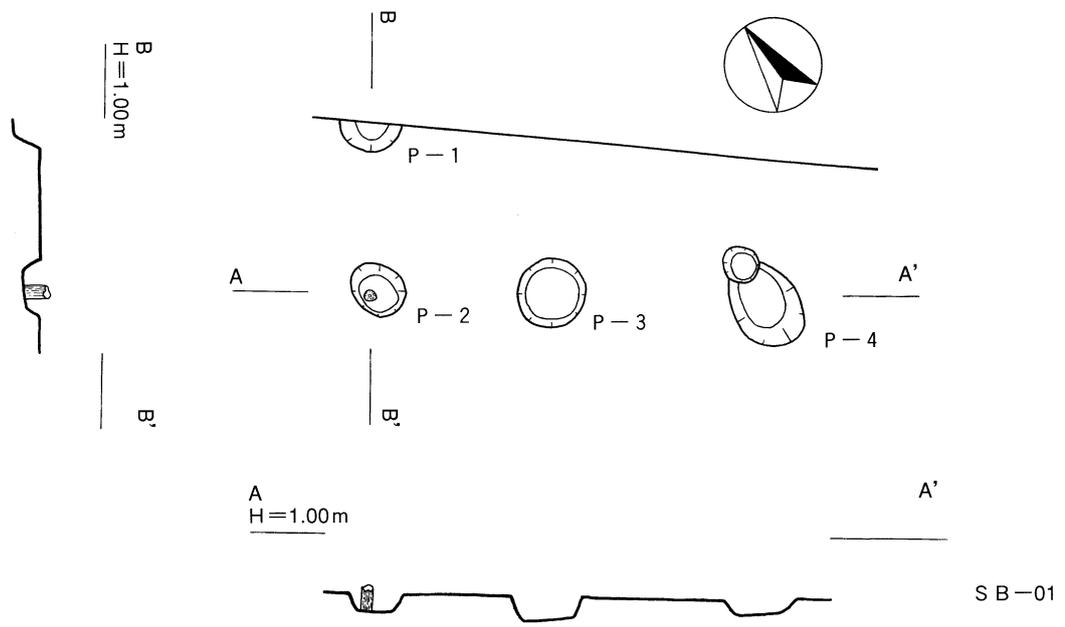
SB-01は北東側が調査区外にのびているが、桁行2間、梁行1間以上の建物である。建物の規模は桁行4.1m、梁行1.8m以上をはかり、柱穴は円形及び楕円形を呈しており、径50~100cm、深さ20~30cmをはかる。柱間はP-1~P-2が1.8m、P-2~P-3が1.9mとほぼ等間であるが、P-3~P-4は2.2mと広くなる。P-2には径12~14cmの柱痕がある。主軸はN-55°-wである。

柱穴からは遺物は出土しなかった。

SB-02 (第5図)

SB-02は北東側及び南東側が調査区外にのびているが、梁行1間以上の建物である。桁行についてはP-5で完結するのか、さらに南東へのびるのかは不明であるが、桁行3間あるいは4間以上のいずれかの建物が想定できる。建物の規模は桁行3間の場合は桁行6.4m、桁行4間以上の場合は桁行6.4m以上、梁行3.5mをはかる。柱穴は円形を呈しており、径40~90cm、深さ10~40cmをはかる。柱間はP-1~P-2が2.0m、P-2~P-3が2.1m、P-4~P-5が2.0mとほぼ等間であるが、P-3~P-4は2.3mとやや広くなる。P-1には径18cm、P-2には16×17cm、P-4には16×8cmの柱痕があり、P-3には根石がある。主軸はN-56°-wである。

柱穴からは遺物は出土しなかった。



第5図 SB-01・02遺構図

S D-02 (第6図)

S D-02は直線的にのびる溝で、北東側はS B-01の北西で完結するが、南西側はさらに調査区外へのびている。現状で長さ5.1m、幅1.0~1.2m、深さ0.4mをはかり、主軸はN-32° - Eである。

遺物は図示できないが、陶器と土器が出土した。

S D-04 (第6図)

S D-04は直線的にのびる溝で、北東側はS A-01の南西で完結するが、南西側はさらに調査区外へのびている。現状で長さ3.2m、幅0.6~0.7m、深さ0.1~0.2mをはかり、主軸はN-35° - Eである。

遺物は出土しなかった。

S D-05 (第6図)

S D-05は直線的にのびる溝で、北東側、南西側ともさらに調査区外へのびている。S D-06を切っており、現状で長さ5.1m、幅1.5~1.9m、深さ0.3mをはかり、主軸はN-35° - Eである。

遺物は出土しなかった。

S D-06 (第6図)

S D-06は直線的にのびる溝で、東側、西側ともさらに調査区外へのびている。S D-05によって切られており、S D-06が埋没した後にS A-02のP-4が掘られている。現状で長さ7.7m、幅1.7~1.9m、深さ0.2mをはかり、主軸はN-87° - wである。

遺物は出土しなかった。

S D-09 (第7図)

S D-09は直線的にのびる溝で、東側、西側ともさらに調査区外へのびている。S D-10によって切られており、現状で長さ9.4m、幅0.7~0.8m、深さ0.2~0.4mをはかり、主軸はN-87° - wである。

遺物は図示できないが土器が出土した。

S D-10 (第7図)

S D-10は直線的にのびる溝で、北東側、南西側ともさらに調査区外へのびている。S A-01、S B-02、S D-09を切っており、現状で長さ5.7m、幅0.6~1.1m、深さ0.2mをはかり、主軸はN-38° - Eである。

遺物は陶器、播鉢、瓦、須恵器が出土した。1、2は陶器で、1は灯明皿、2は肥前系の鉢である。3は土器の皿、4は播鉢である。

S D-11 (第7図)

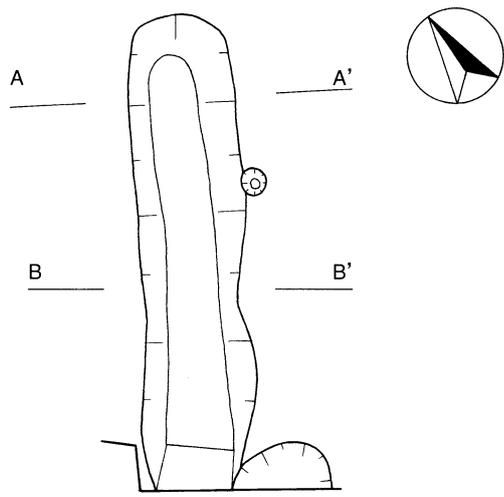
S D-11は現状で長さ6.1m、幅0.7~0.8m、深さ0.2mをはかる。主軸はN-40° - Eである。

遺物は出土しなかった。

S E-01 (第8図)

S E-01は石組の井戸で、土層断面では第2層上面から掘込まれているが、第2層上面では検出ができず、第4層上面で検出した。掘方は第4層上面では径2.5mの円形を呈しており、第2層上面からの深さは0.5mをはかる。掘り込みは北西側はなだらかに立ち上がるが、南東側は2段になっている。石組は北西側では2段になっているが、これ以外は1段である。

遺物は図示できないが陶器が出土した。



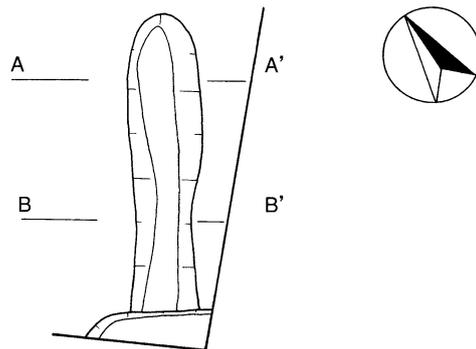
A
H=1.00m A'



B
H=1.00m B'



S D-02



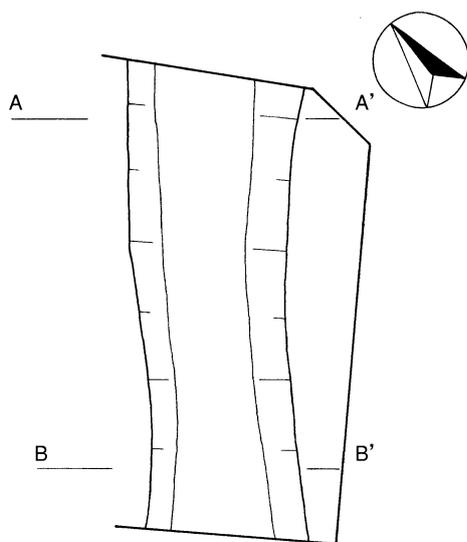
A
H=1.00m A'



B
H=1.00m B'



S D-04



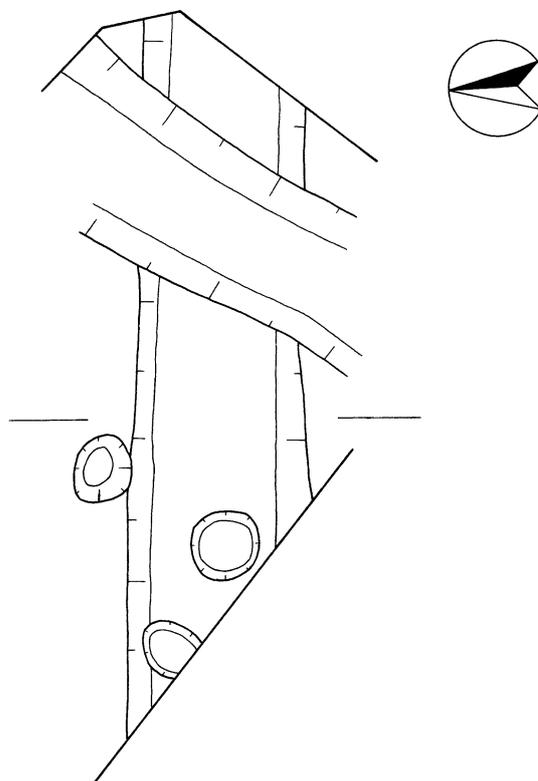
A
H=1.00m A'



B
H=1.00m B'



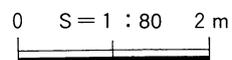
S D-05



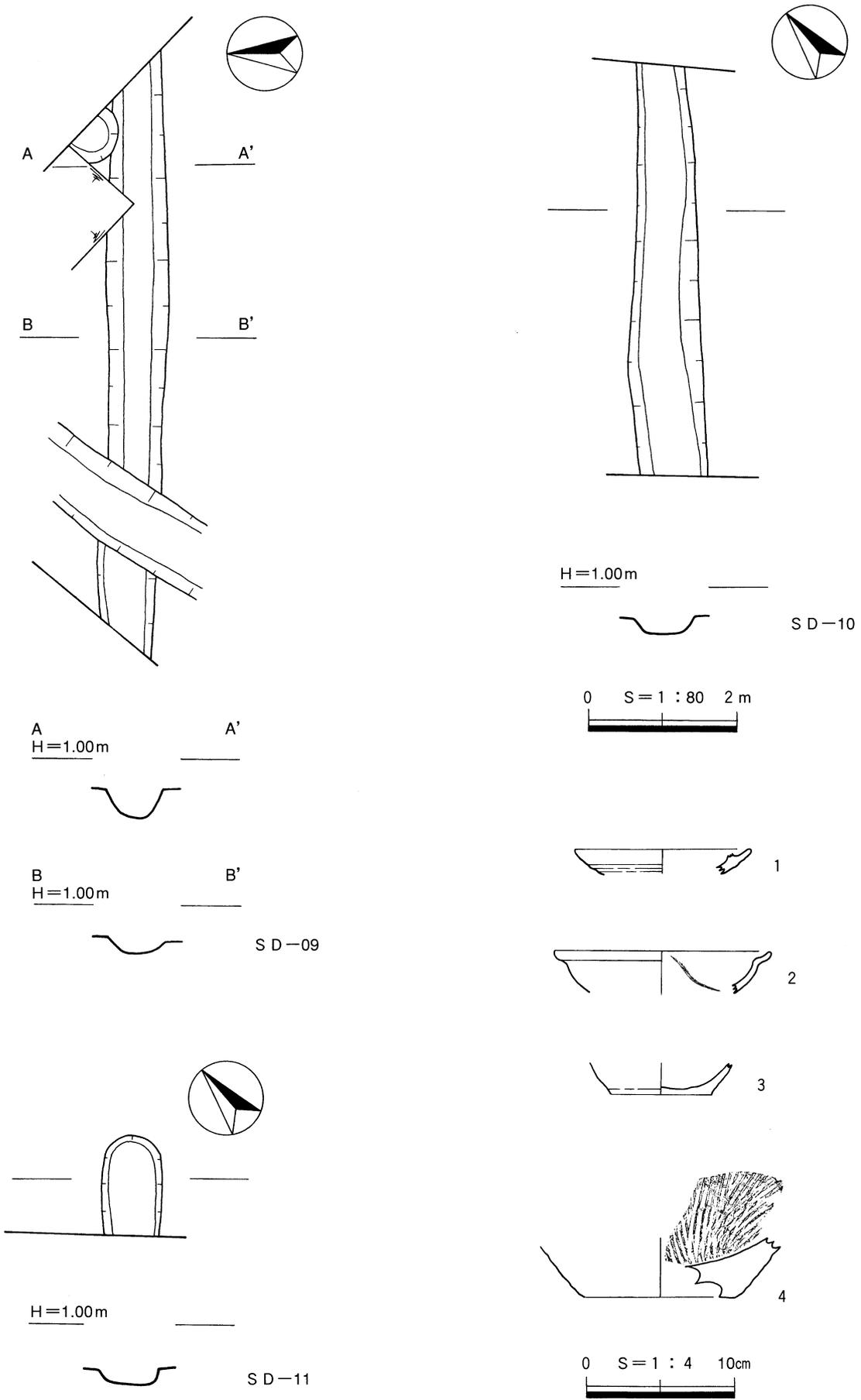
H=1.00m



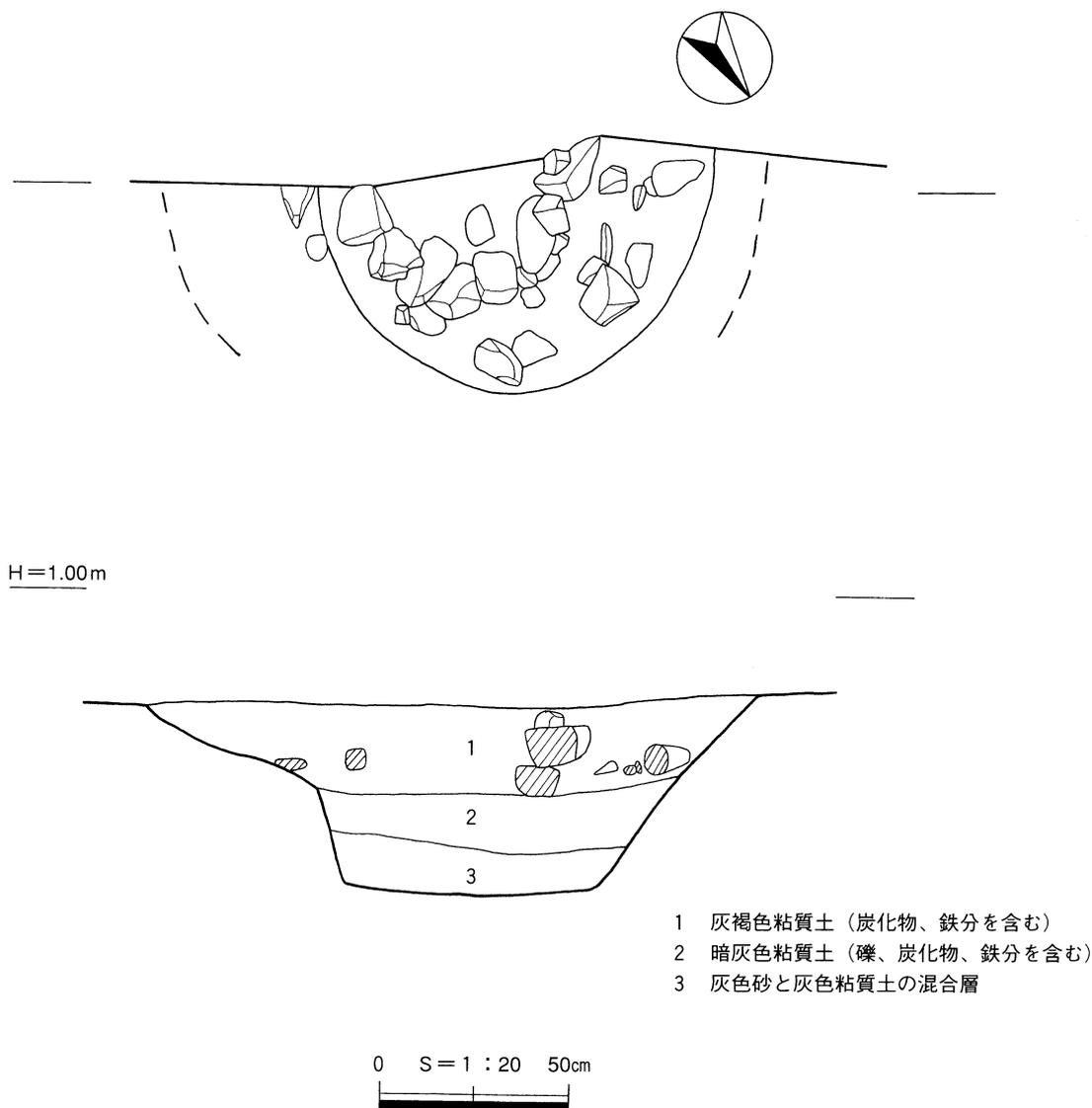
S D-06



第6図 S D-02・04・05・06遺構図



第7図 SD-09・10・11遺構図及びSD-10出土遺物実測図



- 1 灰褐色粘質土（炭化物、鉄分を含む）
- 2 暗灰色粘質土（礫、炭化物、鉄分を含む）
- 3 灰色砂と灰色粘質土の混合層

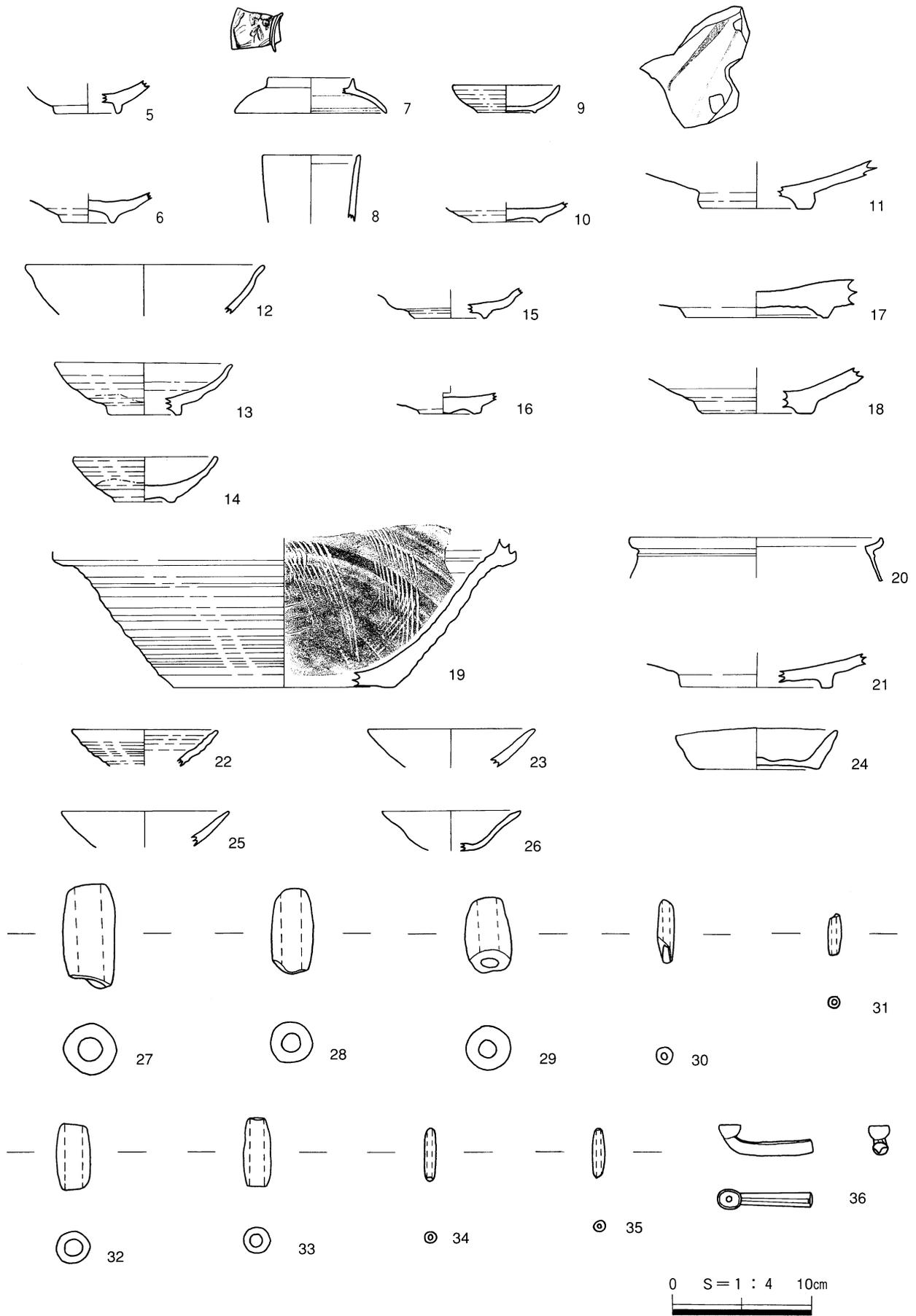
第 8 図 SE-01遺構図

第 3 節 遺構外出土遺物（第 9 図）

5～8は磁器である。5は碗で、高台に砂が付着している。6は皿で、見込みには砂が付着し、さらに蛇ノ目釉剥ぎが施されている。また、高台内外面とも無釉である。7は蓋である。8はそば猪口で、口縁内面は釉剥ぎが施されている。

9～21は陶器である。9、10は瀬戸・美濃系の皿、11は志野の大皿あるいは鉢で、見込みには胎土目がある。12～18は肥前系である。12は碗、13～16は皿で、いずれも見込みには目跡は認められない。17、18は大皿あるいは鉢で、18の見込みには胎土目がある。19は備前の播鉢である。20、21は在地系で、20は鍋、21は大皿あるいは鉢である。

22～26は土器で、いずれも煤あるいは有機物が付着していることから、灯明皿として用いられたものである。27～35は土錘、36は煙管の雁首である。



第9図 遺構外出土遺物実測図

第4章 ま と め

今回の調査では、掘立柱建物と柵列、屋敷境界であると思われる溝状遺構、井戸を検出した。これらは切合関係や主軸方向、検出面から5時期に分類できるものと思われる。なお、各々の時期については遺構内からの出土遺物が少ないことから、詳細は不明である。

以下、時期毎に概観したい。

第1期

第1期の遺構にはSD-06とSD-09がある。いずれもN-87°-Wの主軸方向をとり、心々間距離は4.8mをはかる。

『鳥取縣西伯郡米子町地圖』（明治24年 1891）では外堀の東側にN-3~4°-Eの方向をとる方形地割（条里）がみられ、方向的にはSD-06とSD-09と直交するかたちとなる。この方形地割（条里）の成立がいつまで遡るものかは不明であるが、SD-06とSD-09はこの方形地割（条里）との関連が窺える。また、この方形地割（条里）と米子城下の町割の関係について、その可能性が指摘されており（岩佐 1991）、米子城下の町割の形成を考えるうえでSD-06とSD-09は大変興味深いものである。なお、条里地割を利用した城下町の形成には三重県名張、奈良県大和郡山等の事例がある。

第2期

第2期の遺構にはSA-02、SB-01・02、SD-04・05がある。SB-01はN-55°-W、SB-02はN-56°-W、SA-02はN-34°-E、SD-04・05はN-35°-Eの主軸方向をとる。SD-05は屋敷境界の溝で、SA-02は屋敷地の遮蔽施設であると考えられる。SB-01とSB-02は北東側は調査区外にかかっているために、梁行の間数は確認できていないが、江戸期の屋敷境界を踏襲したものと推測される隣地との境界線からの距離から考えると梁行はSB-01は1間、SB-02は2間程度であると推測される。

第3期

第3期の遺構にはSA-01とSD-02がある。SA-01はN-58°-W、SD-02はN-32°-Eの主軸方向をとる。SD-02は屋敷境界の溝、SA-01は屋敷地内の区画塀であると思われる。

第4期

第4期の遺構にはSD-10とSD-11がある。SD-10はN-38°-E、SD-11はN-40°-Eの主軸方向をとり、心々間距離は8.8mである。いずれも土地境界の溝であると思われる。

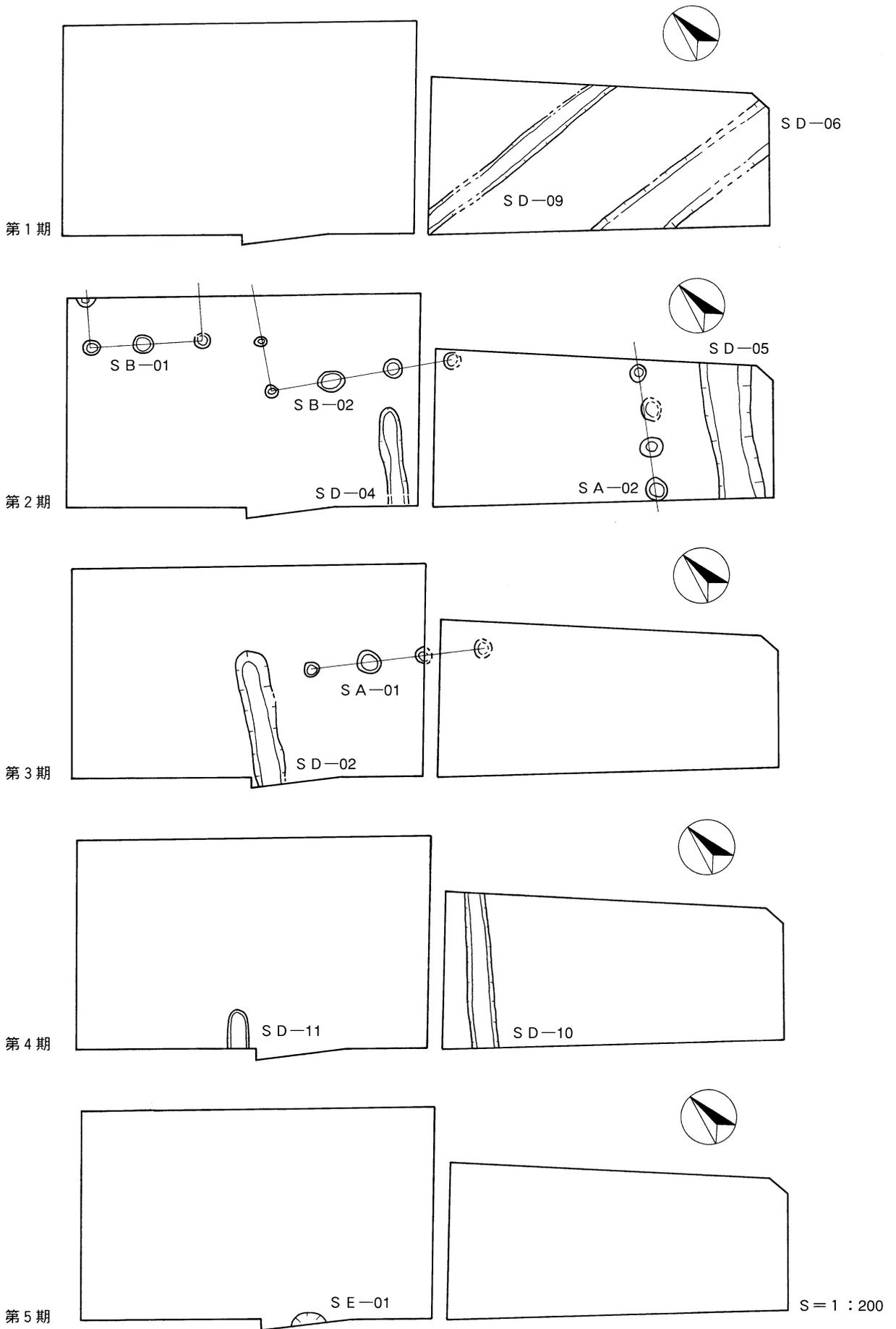
第5期

第5期の遺構にはSE-01がある。

SE-01は石組の井戸で、『鳥取縣米子市字限地圖』（大正4年 1915）以降の屋敷に伴うものと考えられる。

以上、主軸方向を主体に遺構の変遷をみてきたが、あらためて主軸方向の変遷をみてみると、第1期はN-87°-W、第2期はN-34~35°-E、第3期はN-32°-E、第4期はN-38~40°-Eとなっている。

米子城下の街区は長方形を呈しておらず、場所によって長短があり、そのため街区を取り囲む道も各々主軸方向が異なる。国道9号線の北西側は比較的江戸期の町割が残っており、現在も当時の道が拡幅されて利用されて



第10図 遺構変遷図

いる。調査地北西側の道の主軸方向はN-38°-Eで、第4期の遺構の主軸方向とほぼ一致し、調査地南東側の国道9号線の主軸方向はN-35°-Eで、第2期の遺構の主軸方向とほぼ一致する。このことから、第2期の遺構は米子城内郭の正門へ通じる街区南東側の道を、第4期の遺構は街区北西側の道を基準にして形成された可能性がある。

次に現存する米子城下の絵図から調査地の土地利用の変遷をみると、まず、17世紀後半以前の『米子城下古絵図』では侍屋敷となっている。今回の調査では当該期の遺物が出土しているが、量的には少なく、遺構も未確認であるため、屋敷の形成に関わる具体像は明らかではない。また、『伯耆国米子平図』（宝永6年 1709）と『湊山金城米子新府』（享保5年 1720）では陸田、18世紀後半の『米子御城下図』では明地畑、『米子城市圖』（安政年間 1854～1859）では田、『米子町田畑御攷宗奇地續総計』（明治3年 1870）では屋敷は存在せず、『鳥取縣西伯郡米子町地圖』（明治24年 1891）では田、『鳥取縣米子市字限地圖』（大正4年 1915）では宅地となっており、絵図をみる限りでは調査地は18世紀初頭～19世紀末には屋敷は存在していない。しかし、今回の調査では第2期に掘立柱建物2棟と屋敷境界溝、屋敷の遮蔽施設を確認している。これらは出土遺物から20世紀初頭まで下るものではなく、18世紀後半～19世紀の範疇におさまるものであると思われる、絵図が存在しない時期のものであると考えられる。

参考文献

- 岩永 実 「鳥取県の条里地域の研究（二）」 『鳥取大学学芸学部研究報告（人文科学）』 Vol. 13 1962
- 畠中 弘 『弓浜物語（伯耆文庫6）』 1989
- 岩佐武彦 「明治期における米子市街地の発展過程」 『地図』 Vol. 29 No.2 1991
- 米子市立山陰歴史館 『米子城絵図面 米子城資料第1集』 1990
- 米子市 『新修米子市史』 第12巻 資料編 絵図・地図 1997
- 『米子城市圖』 1854～1859
- 『米子町田畑御攷宗奇地續総計』 1870
- 『鳥取縣西伯郡米子町地圖』 1891
- 『鳥取縣米子市字限地圖』 1915

出土陶磁器、土器観察表

遺物番号	出土地	種類	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	産地	特徴
1	S D-10	陶器	灯明皿	※ 11.8		△ 1.6		
2	S D-10	陶器	鉢	※ 18.8		△ 2.9	肥前系	
3	S D-10	土器	皿		6.8	△ 2.2		
4	S D-10	陶器	播鉢		※ 10.2	△ 4.1		
5	2区2層	磁器	碗		※ 4.6	△ 2.4		高台に砂付着
6	1区2層	磁器	皿		3.8	△ 2.2		見込み蛇ノ目釉剥ぎ、砂付着
7	1区2層	磁器	蓋	※ 10.8		2.6		
8	2区2層	磁器	そば猪口	※ 6.8		△ 4.9		口縁部内面釉剥ぎ
9	1区2層	陶器	皿	7.6	4.0	2.0	瀬戸・美濃系	
10	1区2層	陶器	皿		※ 5.0	△ 1.4	瀬戸・美濃系	
11	1区2層	陶器	大皿or鉢		※ 8.0	△ 3.6	志野	見込みに胎土目あり
12	1区2層	陶器	碗	※ 17.0		△ 3.7	肥前系	
13	2区2層	陶器	皿	※ 12.4	※ 5.0	3.8	肥前系	見込みに目跡なし
14	1区3層	陶器	皿	※ 10.2	※ 3.6	3.3	肥前系	見込みに目跡なし
15	2区3層	陶器	皿		※ 5.2	△ 2.1	肥前系	見込みに目跡なし
16	1区2層	陶器	皿		※ 4.4	△ 1.5	肥前系	見込みに目跡なし
17	1区2層	陶器	大皿or鉢		10.4	△ 2.8	肥前系	
18	1区2層	陶器	大皿or鉢		※ 7.8	△ 3.3	肥前系	見込みに胎土目あり
19	2区2層	陶器	播鉢		※ 16.0	△ 10.8	備前	
20	2区2層	陶器	鍋	※ 18.0		△ 3.0	在地系	
21	1区2層	陶器	大皿or鉢		※ 10.8	△ 2.5	在地系	
22	2区3層	土器	灯明皿	※ 10.4		△ 2.6		煤あるいは有機物付着
23	2区3層	土器	灯明皿	※ 15.8		△ 2.6		煤あるいは有機物付着
24	2区2層	土器	灯明皿	※ 11.8		△ 2.8		煤あるいは有機物付着
25	2区3層	土器	灯明皿	※ 9.8		△ 2.9		煤あるいは有機物付着
26	2区2層	土器	灯明皿	11.0	8.8	3.0		煤あるいは有機物付着

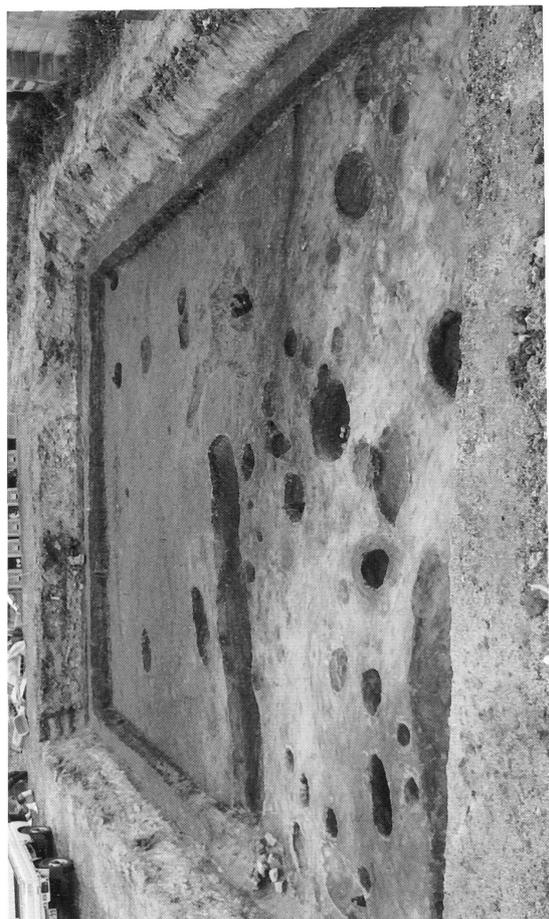
圖 版



2区全景 (北西から)



S A-01、S B-02 (南東から)



1区全景 (南東から)



S B-01 (北西から)



S D-04 (南西から)



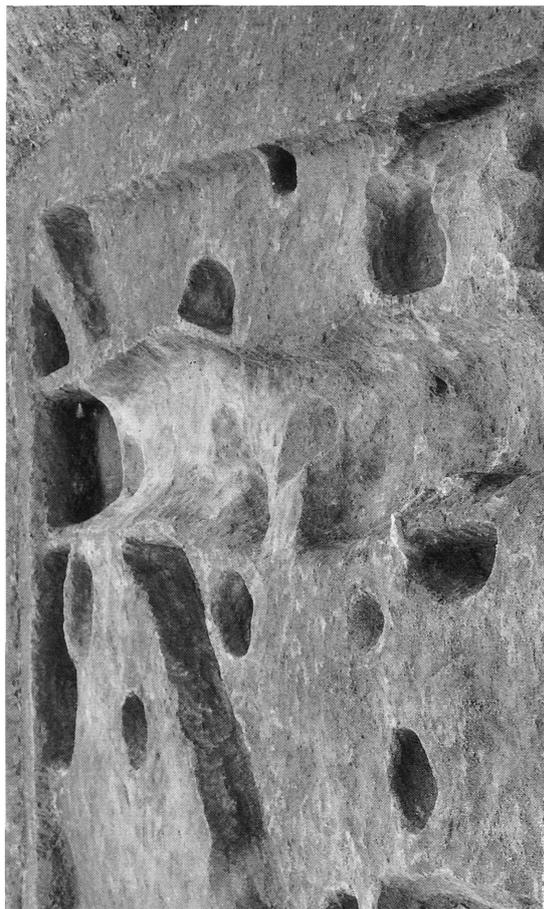
S D-06 (西から)



S D-02 (南西から)



S D-05 (北東から)



SD-10 (北東から)



SE-01断面

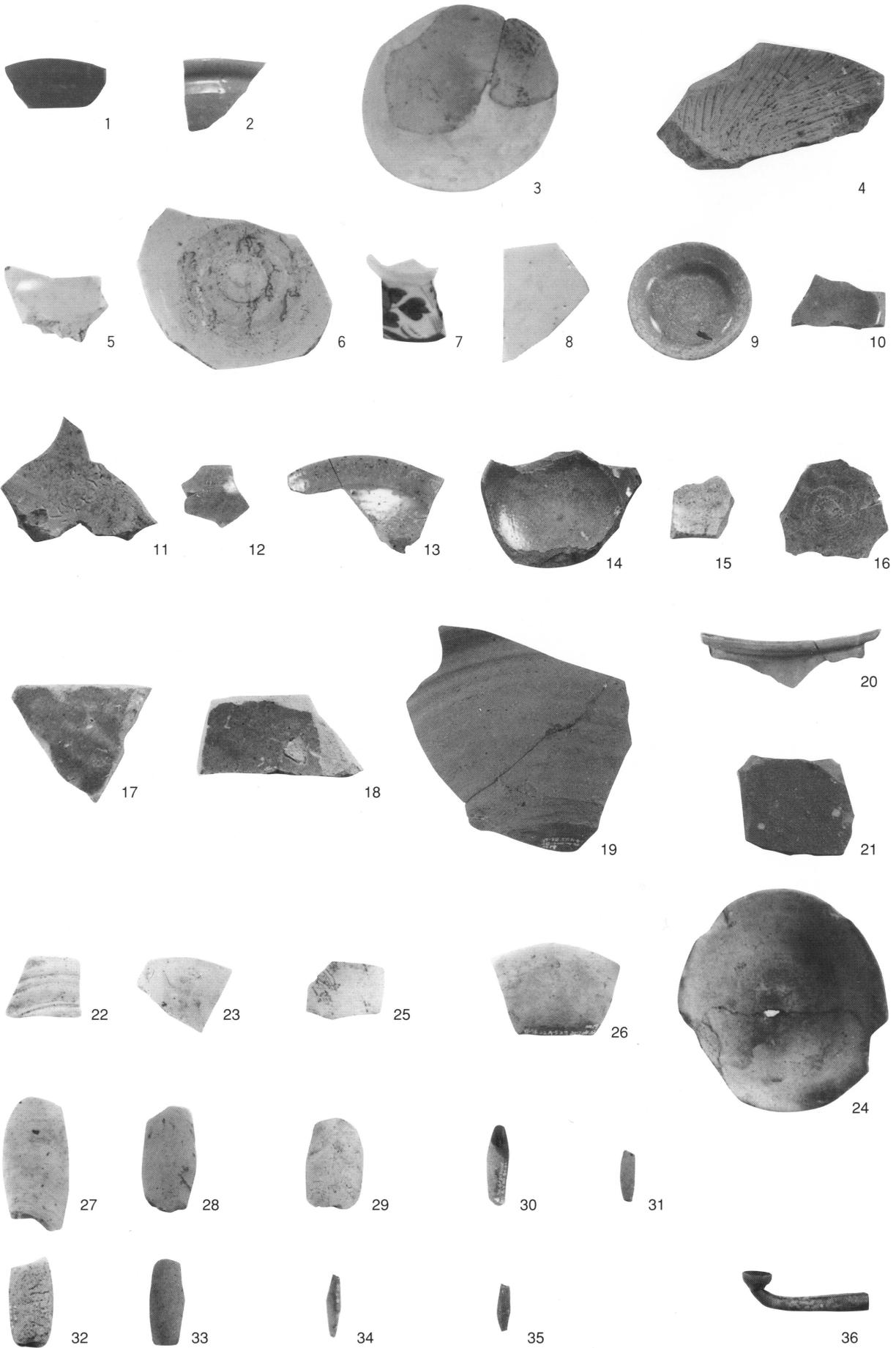


SD-09 (東から)



SE-01

图版 4



出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	よなごじょうせき							
書名	米子城跡 第38次調査							
副書名								
巻次								
シリーズ名	(財)米子市教育文化事業団文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	41							
編著者名	高橋浩樹							
編集機関	財団法人 米子市教育文化事業団 埋蔵文化財調査室							
所在地	〒683-0033 鳥取県米子市長砂町935-1 TEL0859-22-7209							
発行年月日	西暦2003年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
よなごじょうせき 米子城跡 第38次調査	とっとりけんよなごし 鳥取県米子市 かまろちょう 加茂町	31202	719	35度 25分 33秒	133度 19分 54秒	20020409～ 20020426	273.70m ²	マンション建築工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
米子城跡 第38次調査	城下町	江戸時代 明治	柵列 溝状遺構 掘立柱建物 井戸	陶磁器、瓦、煙管、土錘				

(財)米子市教育文化事業団文化財発掘調査報告書 4 1

米子城跡 第 3 8 次調査

2 0 0 3 年 3 月

編集・発行 財団法人 米子市教育文化事業団

〒6 8 3 - 0 0 3 3 鳥取県米子市長砂町 9 3 5 - 1

印 刷 (有)米子プリント社